



昭和42年(1967年)

8月号 (No. 266)

社団法人 日本山岳会
(J. A. C.)

目次

随想

- アメリカの砂漠……伊藤秀五郎… 1
 新ルームのために……島田 巽… 2
 天狗の住居……田畑真一… 5
 われわれの会員……望月達夫… 14

登山関係者の来日

- マイク・バンクス氏夫妻…… 3
 歓迎会・講演・富士登山
 三浦半島と北アルプス…川上隆… 4
 京都と奈良……伴 明… 5
 コロラド山岳会……関口周也… 13
 ネパール国・マナンダハー氏…… 15

海外通信

- 白砂会・ボリビア・長野隊・A.C訪問

会員短信

- 知床の雨……川崎精雄… 6

研究及び紹介

- 東部 H.K. の新高度……吉沢一郎… 6
 地図 (東部 H.K., 中部 H.K. の 6000
 m 峰中部 H.K. 詳図) …… 10, 11, 12

図書紹介

- “St. Elias と McKinley”, “美しき
 Matterhorn”
 谷川岳登山規制地域の入山手続… 13

計報

- …… 14

会員異動

- …… 14

ルーム基金募金現況

- …… 15

× × ×

集 会 案 内

◎第二三回小集会

「富士山と私」松方三郎氏

▽とき 八月十六日(水)六・四五分

▽ところ 本会集會室

松方会長を囲んで、お話しを聞いた

り、懇談する会です。婦人懇談会的主

催ですが、男性会員の参加を歓迎しま

す。多数ご出席を。

◎第二三四回小集会

「山の怪談・怪異を語る会」

司 会 西丸震哉氏

▽とき 八月三日(水)六・三〇分

▽ところ 本会集會室

たとえ文明が進もうとも、もし怪奇

現象のようなものが現実存在するの

であれば、昔からの言い伝えだけでな

くて、我々にもそれに遭遇する機会が

あるはずだ。

会員諸氏のなかには、現在の科学知

識では割り切れない何等かの怪異的な

出来事を、自然界のなかで体験されて

いる方もあるのではないかと思います。

特異体験をお持ちの方は、是非出席

されて公表していただき、この未知の

分野について共に、夏の一夜を考えて

すごしたいと思ひます。(西丸)

◎ルーム移転記念パーティー

▽とき 九月八日(金)六時より

▽ところ 本会ルーム

▽会費 五〇〇円

新ルームの記念パーティーを行ない

ます。出席希望者は、九月二日まで

事務局へお申込み下さい。電話でお申

込

下さっても結構です。(電二九三

七四四)

☆☆☆
アメリカの
砂 漠
☆☆☆

伊藤秀五郎

サンフランシスコからコロラド州のデンバーに飛ぶ途中、ソルトレイクの周辺に広がるグレイト・ソルトレイク砂漠を空から見る景観はじつに印象的である。アメリカの西部には意外に砂漠が多い。オレゴン州のグレイト・サンディ砂漠、ワイオミング州のコロラド砂漠、カリフォルニア州のモヘイブ砂漠、アリゾナ州北部のベインテッド砂漠、南部のギラ砂漠など、いずれも相当に広大なものである。メキシコ国境に沿って走る南太平洋鉄道は、ほとんど三日間砂漠地帯を走りつづける。

しかしグレイト・ソルトレイク・デザートは、銀白に輝く雄大な

塩砂で、ふつうの砂漠とはいちじるしく違った異観を呈している。この無機の延々とした無人境には、生硬というよりはむしろ新鮮な造型美がある。そこでは人間の技巧は意味を失う。そこには人工の修正を拒否する自然がある。これを自然の驚異とみるか、無意味の荒唐とみるかは人の自由であるが、すくなくとも人間によって再現も模倣も不可能なことは間違いない。コロラド大渓谷についても同じことがいえるだろう。一台のブルドーザーによってたちまち原型の失われるほどの日本の風景や自然の規模に比べると、段違いにスケールの大きい自然の造型が、科学技術の最先端をいくアメリカの国内のいたるところにあるということは、逆説的にいって、たしかに造化の妙である。

わたくしは、デンバーからボルダーへ、高原の牧場地帯を走る車

の上でも、昨日見たグレイト・ソルトレイク・デザートの光景を思い浮べていた。そして、アメリカ大陸に散在するこれらの砂漠が、もしかすると、アメリカ人の精神形成になんらかの影響を与えたのではないかということ、ふと思いついた。

しかしアメリカの場合は、その

る。アメリカ人は西部開拓の歴史で、この広大な砂漠を避けて進むことはできなかった。砂漠のなかに鉄道を敷き、それを横断するハイウェイを建設した。砂漠の彼方に大山脈があり、それを越した先にもまたいくつかの砂漠が横たわっていた。そしてその先の豊饒なカリフォルニアの陸地の尽きるところに、太平洋の波濤がひろがっている。文化醸成の母胎となった東部と、砂漠を距てた西部辺境との、人間および文化の還流は、それがわずかに二〇〇年に満たない短い時間ではあったとしても、アメリカの歴史を形成した人間精神に、なんらかの影響を与えずにはおかなかったらう。

アメリカの西端が、もしミシシッピ川で終わっていたと仮定してみよう。アメリカの歴史も、そこに発展した文化も、現在のものと

(次頁へ続く)

(前頁より)

はかなり違ったものになっただろう。大陸を南北に貫くロッキー山脈、コロラド大渓谷、グレイト・ソルトレイク、スネークリバー、そしてそのあいだに横たわるプラトーと多くの大砂漠。こういう

変化にとむ地殻の造型が、アメリカ人の精神活動とまったく無関係であったとは考えられないではないか。アメリカの西部国境が太平洋岸に達したのは一八四八年であるが、それから、およそ一〇〇年に、アメリカは西部沿岸地帯に一つの新しい文化圏を作り上げた。

おそらくその創作活動には、中西部と太平洋岸とのあいだを埋めるこれらの地殻の大造型が、刺激ともなり、また無意識のうちに新文化のイメージの素材としても役立ったのではないかと思う。すこし論理を飛躍させれば、アメリカのテクノロジーを発展させた秘密の一つが、案外このあたりにあるのかも知れない。気候エネルギーと文明との関係については、ハンチントンのすぐれた研究がある。しかし文化における地殻の空間的造型の意味を指摘した人は稀のよう

だ。
アメリカ大陸に多くの砂漠が存在することは、これからもアメリカ人の精神史にとっては大きな意味をもつように思われる。現在は土地利用の面からは不毛といえるが、将来は砂漠の大きかりな緑地

化や砂漠のなかに大都市の建設が計画される時代がくるかもしれない。既成の風土論にとらわれず、現在文明における砂漠の意味を、あらためて考えてみるのもむだではないだろう。(完)



新ルームのために

島田 巽

引越しも無事に完了したので、七月に入って早々、日本山岳会の新しい本拠をはじめ訪れたが、新ルームの初印象はなかなかよかった。

専用の表玄関というわけには、部屋借りの身分だからゆかないが、それでも五階まで自動式エレベーターで直行すると、この階、約四十坪の全床面積がわがJACCの領域なので、これまでの狭い地下生活の仮すまいにくらべると大違いである。スチール書架の並んだ図書室、ソファのある静かな談話室、四、五十人は大丈夫という集会室がそれぞれ独立して配置され、冷暖房も完備というのだから、

ら、会の生活水準も大分向上したことになる。

その上、この新ルームからの眺めは、「都会的山頂からのパノラマ的展望」として、ちょっとしたもので、初訪問の私などいささか驚かされたのである。南から西へと

広く横長に開かれた窓からは、首都高速道路が見おろされ、その彼方には皇居の森が一面に拡がっている。私が訪れたのは日没時であったが、巨大な二条のコンクリートの自動車路の、こちらへ向かってゆったりと傾斜しているさまは、あたかも氷河のうねりを連想させ、そのハイウェイに接しているパレスサイド・ビルは、まさに氷河の側壁を形づくっているし、さらに右手にはコニーデ型の武道館のシルエットも望みされる。皇居の緑は森林限界のように見え、遠くその上には霞ヶ関ビルという孤立峰が地平にそびえ立っている。——これはまあ私個人の幻想的印象に過ぎないが、ともあれ一見に値する景観であることには間違いない。

会のルームが地理的にも便利で、居住性も快適で、しかも図書資料の類が整備されているとなれば、自然に会員諸氏の訪れかたも繁くなり、そこから会の親しい雰囲気も増すだろうし、また事業活動なども活発化することになる。その意味で、会にとっては、よきルーム、よき図書室を持つこ

とは中核的な重要事なのである。戦前の虎ノ門不二屋ビル、戦後の駿河台など、新しいルームを獲得するたびに、会のエネルギーが更新され、増幅されたことは、まだ会員諸氏の記憶に新しいところであらう。

×

はじめて新ルームを訪れた日の掲示板には、この新ルームを手に入れるための募金運動に關して、会員諸氏からの応募額が大きく記されてあった。それを見ると、六月末日現在で目標額(八百万円)の三〇パーセントを越える応募があったということだ。この拙文が掲載されるころには「目標達成」という張り出しがあるよう期待していたが、早手回しに引越はすませたものの、権利金の支払いが遅れるというのでは大変みっともない。というわけで松方会長を委員長として募金委員会は、いまや会員諸氏に協力方をお願いするのに大量の有様である。

募金についてたまたま思い出されるのは、十九年前の昭和二十三年、駿河台に図書室を再建するために、行なった資金募集のことである。戦後わずか二年余、国中が食糧の入手に追われ通しのころ、よくも、あれだけの建物を完成させる資金を、会員が中心となって集め得たものと、今さらながら感じ入るのである。「山岳図書館」とも言うべきものは、どうしても本

会の手によって完成しなければならぬ事業である」と当時も力説され、多くの会員が、戦災で失われた虎の門の図書室にかわる新しいものを再興しようとの熱意から、進んで協力された結果、あのかの募金運動は成功したのであった。

あの駿河台の図書室は戦後、会の国際的活動への強力な根拠地にもなったのだが、当時、インフレ進行下の生活のなかで、一口五百円という募金に積極的に応じられた各位の厚意を、いま改めて想起せずにはいられない。

駿河台の図書室は募金開始後一年あまりで完成して、昭和二十四年の三月二十六日から落成記念として小島島水展覧会を開くことができた。こんども新しいルームの開設を記念する行事がいずれ近く計画されるものと思われるが、何はともあれまず八百万円の目標額を達成しなければならぬ。戦後二、三年のころに比べれば、今日の社会の安定度は格段に増しているし、会としても会員数がふえているので、あの時に達成されたことが、こんどは不可能というはずはないだろう。むしろ、目標額をはるかに突破することを期待したいのだが、そのために会員各位に重ねて御援助、御協力をお願い申し上げます。

(四二・七・一一)

△ラカボシ峰(7788cm)の初登頂者△ マイク・バンクス氏夫妻の来日



(1)富士登山と箱根見物
(2)三浦半島の見物と北アルプス登山

World of Snowと題したスライドによるレクチャーを行なってもらった。

以下にその概要を記す。(松田)

(1)本会主催 歓迎会
日時 五月八日(月)午後六時〜八時
会場 麻布国際文化会館

五月七日午後軍用機で来日した、バンクス夫妻を宿舎三番町ホテルに、丹部、松田、芳野の三名で訪れ、今後のスケジニールにつき打合せを行ない、翌八日は、田辺寿会員の案内で、都内見物に行った後、夕刻、国際文化会館に到着。午後六時よりレクチャー・ルームにおいて「The World of Snow」の演題のもと、Illustrated lecture

を行なった。このスライドは、彼の過去の登山をまとめたもので、聴衆に多大の感銘を与えた。別掲の講演要旨はバンクス氏自らが、書かれたもので、それを開口理事が翻訳して、当日会場で配布したものである。

講演が終了した後、新館のホールで歓迎レセプションを開催したが、彼の所属しているアルバイン・クラブのリチャード・ガウディング氏や、同じくヒマラヤン・クラブのマレイ氏等の顔もみえ、話題も、グリーンランド、南極、アラスカ、カラコルムと世界の隅々におよびまことに楽しい会合であった。尚席上、三田副会長より本会のバッヂと山岳61年を贈呈した。

(出席者)
朝井一男、板倉勝正、神谷恭、勝田房治、菊池武昭、菊地文雄、近藤茂吉、向後元彦、小林猛臣、小林幹三郎、佐藤久一朗、斎藤桂、島田興、鈴木英一、関口周也、瀬名貞利、丹部節雄、鳴嶋正吾、錦織保清、中島啓、名見耶達男、松田雄一、牧野文子、松本熊次郎、三田幸夫、宮島貞一郎、浜中康栄、羽田栄治、日高信六郎、矢田城太郎、山口健児、芳野起夫、芳野菊子、吉沢一郎、池田錦重、宮原義、佐藤佳年、阿部正子、高橋照、田中甫、隈部恵子、三浦義明、堀川英司郎、笹島敏一(拓大山岳部) 風見武秀、伊藤彰彦(拓大山岳部) 川名健史(拓大山岳部) 田辺寿、藤田俊子、鈴木淳平、鈴木木之、木村義昌、斎藤健治、高橋定昌、村山雅美、武蔵光、沼倉寛二郎、Richard Gowrie, A. V. K. Murray, Fosco Malaini, (以上六十二名)

下の写真は羽田栄治氏撮影。右上のカットはB氏の著書の一つ。左は同書にある水彩ペン画。氏の著書でも一つ私のもっているのが、「Rakaposhii」, Secker & Warburg, London, 1959 がある。(一ノム)

COMMANDO CLIMBER

by

MIKE BANKS

Captain, Special Forces

FOREWORD BY
BRIGADIER SIR JOHN HUNT,
C. B. E., D. S. O.

Illustrated with
36 full color photographs
and
a foreword and introduction by Sir John
L. H. H. H. H.

Mike Banks
Captain, Special Forces
1967

John H. H. H.

LONDON
J. M. DENT & SONS LTD

(3)京都・奈良見物
を分担してもらうことにし、この間、五月八日JACの歓迎会
五月十一日防衛大歓迎会
五月十七日JAC関西支部総会に出席し

を行なった。このスライドは、彼の過去の登山をまとめたもので、聴衆に多大の感銘を与えた。別掲の講演要旨はバンクス氏自らが、書かれたもので、それを開口理事が翻訳して、当日会場で配布したものである。

講演が終了した後、新館のホールで歓迎レセプションを開催したが、彼の所属しているアルバイン・クラブのリチャード・ガウディング氏や、同じくヒマラヤン・クラブのマレイ氏等の顔もみえ、話題も、グリーンランド、南極、アラスカ、カラコルムと世界の隅々におよびまことに楽しい会合であった。尚席上、三田副会長より本会のバッヂと山岳61年を贈呈した。

マイク・バンクス氏講演要旨
「演題」 The World of Snow
一、雪の世界
一、はじめに
事は、氷幅で地盤調査法によりその厚さを測ることにあった。この遠征隊は北東海岸に基地をおいたが、少佐とその雪上車の一隊は、氷幅を横断し、西海岸の米軍基地チューレに到った。その距離一八〇キロ。

三、二つのヒマ
ラヤ遠征
一九五六年に、カラコルムのラカボシ峰を目指し、四名の小遠征隊を率いて行った。少佐は七六三m(二五〇〇フット)に達した。

一九五八年、強力な英国軍隊のチームを率い再度ラカボシ峰。隊員のドクタ1、バディ博士とともに、悪天候下登頂に成功す。

四、マッキ
ンレー峰
一九六二年、英国軍人遠征隊を率い同峰その他に登頂。

五、ローガ
ン山群
一九六三年、三人の米国登山家とともに、カナダの北西部にある未知のローガン山群で、処女峰一座に登る。

六、グリーンランド
一九六六年四月、少佐は英国人の仲間一人とエスキモーの機動者一〇人とともに、アンマサリック付近で二七〇キロの遠征を行なった。この旅行の目的は夏期に行なうグリーンランド・スイスの山々の遠征に使う多量の物資をデポするためであった。夏期の遠征には参加しなかったが、この時は三一座の未踏峰に登った。(以上)



一九四八年、バンクス少佐は英国海兵隊の軍事教官として、登山訓練をはじめた。ジブラルタルでの岩登り、アフリカの最高峰キリマンジャロ、欧州アルプスに登り、冬期ノルウェーで軍隊のスキー訓練に参加。
二、一九五二〜五四年
グリーンランド遠征
少佐はグリーンランドの北緯七八度の地点で科学調査を行なうために二年間を送った。これは大規模な英国の科学調査の一環であった。少佐の主な仕事は、氷幅で地盤調査法によりその厚さを測ることにあった。この遠征隊は北東海岸に基地をおいたが、少佐とその雪上車の一隊は、氷幅を横断し、西海岸の米軍基地チューレに到った。その距離一八〇キロ。

三、二つのヒマ
ラヤ遠征
一九五六年に、カラコルムのラカボシ峰を目指し、四名の小遠征隊を率いて行った。少佐は七六三m(二五〇〇フット)に達した。

一九五八年、強力な英国軍隊のチームを率い再度ラカボシ峰。隊員のドクタ1、バディ博士とともに、悪天候下登頂に成功す。

四、マッキ
ンレー峰
一九六二年、英国軍人遠征隊を率い同峰その他に登頂。

五、ローガ
ン山群
一九六三年、三人の米国登山家とともに、カナダの北西部にある未知のローガン山群で、処女峰一座に登る。

六、グリーンランド
一九六六年四月、少佐は英国人の仲間一人とエスキモーの機動者一〇人とともに、アンマサリック付近で二七〇キロの遠征を行なった。この旅行の目的は夏期に行なうグリーンランド・スイスの山々の遠征に使う多量の物資をデポするためであった。夏期の遠征には参加しなかったが、この時は三一座の未踏峰に登った。(以上)

パンクス一行 の富士登山

五月九日午前、乗用車二台にて三番町ホテル発、同行者は日大のグリーンランド隊の中島隊長以下、池田、神崎、三好、加藤、他にパンクス夫人のお相手としてエーデルワイス・クラブのボリビア・アンデス親善隊の隊員阿部正子氏が同行した。

この日は相憎のガスのため箱根の眺望はなかったが、芦ノ湖を経由して乙女峠、竜坂峠を越え、スカイラインを登り、新築の五合目の芙蓉荘に宿泊、その夜は、グリーンランドの横断の話に花が咲いた。

五月十日、相憎の雨、日本人なら当然、あきらめて下山するような降り方であったが、パンクス夫妻のフアイトは物凄く、雨中登山を決行、九合目付近より風も強く吹雪になったが、全員登頂。特にパンクス夫人は自己のもの登頂高度の記録を更新、殊の他ご満悦であった由である。更にパンクス少佐は、池田、加藤と共に強風についてお鉢廻りも行ない、レンジャー部隊の意気を示した。山頂の観測所では興味ぶかく質問もされた由である。午後、無事下山帰京し、防衛大山岳会にバトンをタッチした。

◇ ◇ ◇

パンクス少佐を迎えて

三浦半島と北アルプス登山

川上 隆

ラカボシ峰の初登頂者であり、またグリーンランド遠征で有名な英国海兵隊マイク・パンクス少佐夫妻が香港より休暇を利用、十二日間の予定で来日するのだが、防衛大学校山岳会として五日間位お世話できないかとの連絡を、本会理事松田雄一氏より受けたのは三月末であった。

防衛大学校山岳会としては、同じような職業の関係でもあり、しかも海外遠征の経験の深いパンクス少佐とともに山に登り、直接話しあえることは得難い機会でもあるので会としてお引き受けることになった。

五月十一日、朝井一男山岳部長、O B田中甫の案内で東京ロックを見物の後鎌倉より横須賀にドライブ。生憎天候が悪く、時間的にも余裕がなかったので、鎌倉は円覚寺と大仏を見物しただけですぐ横須賀にはいり、記念艦「三笠」を見物。本会々員桑谷東海氏の案内を受ける。ここで本会副会長三田幸夫氏と合流。(東京での急なスケジュール変更の関係で三田副会長とはうまく連絡がとれず、大変御迷惑をおかけしてしまった。)

十五日、防衛大学校着。学校関係者に挨拶。十六時三十分より図書館にて山岳部を中心とする四〇余名の学生を前にして、グリーンランド、ラカボシ峰、マッキンリー峰、ローガン山群等、スライドを中心とした説明が行われ、朝井部長の名通訳で参会者ともども楽しくときをすごした。夜は一九時から、東京の市ヶ谷会館にてパンクス夫妻を囲んで防衛大山岳主催の夕食会が開かれた。グリーンランドやラカボシ、ローガン山群の話と、会話は身ぶり手ぶりでずんだが、その主なものあげると、

少佐が受けられた登山訓練について「最初はスコットランドの山地で主として岩登りの訓練を受け、その後ノルウェーにおいてスキー訓練を受けました。登山の訓練はあまり多くは受けていません。しかしアルプスでは沢山の山々に登りました。例えば、マッターホルン、アイガー、ユングフラウ、ヴェネターホルン、シャモニーの山々や、ドロミテの山々などです。なかでもドロミテの山々は岩が堅くしまつて

おり、こゝでの岩登りは非常に印象の深かったのを覚えています。

グリーンランドでは、少佐は北緯七八度付近を横断されていますが、七十二度付近の横断は可能ですか。

「比較的容易にできると思いますが。夏季にはいると海岸付近では水が融けて地表が出来ますが、内陸は巨大なアイス・キャップに覆われているため、容易に登ることができません。グレバスもほとんどありません。しかし西海岸では季節の状況は悪いようです。

季節的には、四月は天候も不安定で寒さききびしく、五・六月もときに悪天候をむかえます。一番暖かいのは八月です。この頃になると氷は解けてグジャグジャとなり、バドルが沢山できます。しかし私は八月に一番歩いてきます。

夏季の気温はほとんど氷点より上です。四月の低いときでも零下十六度C位ですが北海と比較してそれほど寒いこともありません。風はアイスキャップから吹きおろすKATABATIC WINDがかなり強く吹くことがあり、しかも冷い風です。

グリーンランドには未登の山がまだ沢山あります。しかしイギリス、アメリカ、ドイツ、スウェーデン、カナダ、スイスなど多くの国のパーティがはいっていますので、どれが未登であるかは一つ一つ調べておく必要があります。

方法はあります。基地周辺の山々は、ほとんど登られています。ボートを利用してフィヨルドを奥までいってと楽しい登山ができるのではないかと、現地に行くに皮製のボートでこれに空気を吹き込み、二つのエンジンをつけたものがあります。

海外遠征のための休暇はどのように取られていますか。

英国の場合、一年に四十二日間の有給休暇を取ることができます。当りまえのことですが、特別の事情がない限り、有給休暇を取るのには誰にも遠慮することなく、また誰でも取っています。私がラカボシ峰に行った時は三ヶ月ほど休暇を取ったのですが、有給休暇の残り日も軍の深い理解のために給料をもらうことができました。但しそのうちの一分は遠征資金に支出しました。

登山を行うについての資金は、ラカボシの場合は、エベレスト基金から一人当たり一〇万円の援助を受けています。また一九六二年から英国々防省では二年に一回海外へのEXPEDITIONを募集しており、それに対して三十六万円の資金援助があります。私はこれに応募し第一回目、すなわち一九六二年にマッキンリー峰に遠征しました。

防衛大学校山岳会は南極での登山等、海外遠征の計画を再び立てられているようですが、資金は努力でどのように確保するのでしょうか。

「窮すれば通ず」とはどこでも同じだと思います。英国の場合、軍のEXPEDITIONに対する理解は日本の場合より非常に高いようです。しかし、本当に行こうと思えば行けるものです。

夕食会は、和やかな雰囲気終始したが、明日からの穂高山行のため二十一時解散。

十二日、松本駅にてパンクス夫妻、OB大須賀浩、村田光昭合流。ショッビングのため市内運動具店めぐり。パンクス少佐はさすがに慎重、あれこれ機能的な面を調べてニッカーズボンを購入する。夫人はデザイン、色、柄等をみてスーパース、サブザックを購入する。今日は上高地西系屋泊、陸上自衛隊本部隊提供の自動車に乗り、ゆっくりと梓川の景観を楽しみながら西系屋にはいる。

パンクス少佐は宿のコタツが珍しいのか、あれこれ質問し構造をメモして

いる。夫妻とも香港で日本食の経験があるとかで、ハンシの使い方もうまく、日本酒も少量ではあったがたしなんでいた。

十三日、西系屋七時発。潤沢ヒュッテ着十五時。来日してから連日の強行軍で少々バテ気味、夫妻ともどもヒュッテでダウン。

十四日、快晴。夫人はヒュッテにて停泊。パンクス、大須賀、村田はヒュッテ七時発、北尾根五・六のコー吊尾根―奥穂高ザイテングラート―ヒュッテ着十五時。

奥穂高頂上から眺める槍岳や、はるかに白く小さく見える富士山にしばしばみとれていた。夕日に燃える潤沢上部の残雪と岩が美しい。この日の登山は来日以来最高の喜びだったらしい。

彼の岩登り技術は五級とかで、氷雪技術より岩の方を好むようであった。

十五日、快晴。パンクス、村田はヒュッテ七時発。ザイテングラート―奥穂高―ジャンダルム―天狗のコー岳―上高地西系屋着十五時。

夫人は大須賀と共に、ヒュッテ―横尾―明神池を経て上高地に下山。横尾や徳沢から梓川右岸や穂高の眺め、明神池の景観に盛んにワンダフルを話していた。

十六日、上高地十時発。入山のときと同じく松本部隊提供の自動車に乗り、一路松本に入る。松本城見物、日本の城や、着物に驚いたり、目をみはったり。いよいよ関西に行く時間になったようである。感謝されながら松本駅で別れる。大須賀はパンクス夫妻と名古屋まで同行。

今回のパンクス夫妻の接待では、陸幕広報班、陸自松本部隊、西系屋、潤沢ヒュッテ等役職をはなれて御世話いただいたことを特に書き添えておく。(終り)



関西旅行中のパンクス氏夫妻
大阪府大山岳会撮影

◇マイクパンクス氏

の印象◇

—奈良・京都見物に同行して—
伴 明

世界をまたにかけた登山家としては、物腰、態度きわめておやかで、誠実な人柄がにじみでている。一諸に京都、奈良を見物したが、単なる旅行者の眼ではなく、深く宗教的な意味までも探ろうとする真剣さは、私達の方が驚ろかされた。山菜料理や南禅寺の湯とうふを食べながらラカボシやマッキンレーの旅、また私達の遠征の話交換し合って実に楽しいお付き合いをさせて頂いた。香港に帰られてからも早速丁寧な礼状を戴いたが、JACの各位に宜しくとのことであった。

五月十六日、午後九時大阪着、大阪

クリスチャン・センターに宿泊。

五月十七日大阪城、心斎橋見物、好日山荘にて登山用具の買物、午後六時半より、本会関西支部総会に出席、雪の世界」と題してスライドにて講演、終了後水野支部長他委員と会食する。支部から記念品として、ネクタイピン、扇子を贈呈する。

五月十八日、大阪市立大学山岳会員、伴他三名の付添いで奈良見物、東大寺、春日大社、薬師寺、秋篠寺、新薬師寺、法隆寺などをめぐり、五月十九日、大阪府大山岳会員付添にて京都見物、清水寺、詩仙堂、二条城、金閣寺などをめぐり、五月二十日、午後十時半の飛行機にて離阪。

(以上)



『天狗の住居』……

田 畑 真 一

『岳人』の第三四号の「心得帳」欄には、「天狗の住居」という題名のもとに、天狗に関係ある種々の地名が紹介されている。試みに関係の記事を抄出してみると、つぎの通りである。

「白馬岳の堀池の上に、天狗ヶ原」といふ高原があり、槍ヶ岳の南面にも水河遺跡になっている天狗ヶ原がある。また、嶺城山塊には天狗ヶ原山というのがある。これは山頂の湿原を天狗ヶ原と呼んでいるからの山名である。白馬岳には、このほか駒子岳の東面に天狗畑というのがあり、穂高岳には天狗ノ窓(天狗のユルともいう)がある。北八ヶ岳の天狗ノ露路も有名である。

ところでこのような地名をもつ土地に共通しているという地勢的特徴に関しては、つぎのように説明している。

「いずれも山中や、森林内の、意外なところにある清らかな芝生や砂礫地、——一種の別天地をさしている。要するに山の人びとが畏敬するような、神秘的な感じをもつ地域を、天狗の住居のように考えて命名したものであろう。」

この文末には、こうした地名がどのような事情によって与えられたものであるかを説明している。

しかしお説には、とくに具体的な根拠というものが示されていない。要するに大づかみな推察というたぐいのご意見となっている。

そんなわけであるから、題名には「天狗の住居」とあっても、これらの地名のひとつひとつが正しく天狗住居として民俗学的に理解された上で用いられているというわけのものではない。したがって見かたによれば、あいまいなお説の上に、「天狗の住居」などという断定的な題名が与えられてい

るといふことにもなるのである。

とはいふもののわたくしは、ここでお説に対してとくに反論を述べるといふわけのものではない。ここでは、かねて収集してきた関係の史料のうちから若干を紹介させていただき、いっぽうにお説のお説の一、二をさらに補強させていこうとするものである。

その第一点は、『裏見寒話』をひらくと、巻之三のなかには、天狗に関する地名がそのまま天狗の住居であると考えられる説明がみえているということである。『裏見寒話』は宝暦四年(一七五四)に編まれた書物である。すなわち、つぎの通りである。

「御岳山同前(外畑注、北方)下に、八王子坂、外道坂、御岳権現の社、白山権現、天狗の峰、天狗の岩屋、餓鬼山などいふ山々此内に在り。」

ここにみえる天狗の峰というのは、天狗のすむ峰とみることができ、

天狗の岩屋などは、天狗の住居そのものを思わせる。

また『裏見寒話』の巻之五には、まぎれもなく天狗のすむと考えられている山があったのである。すなわち、つぎのような記事がみえている。

「岩窪丹光院山、当山は古府(田畑注、甲府の北よりの町なみ)より東十四五丁を隔つ。曾て嶮難の山に非ず。児女も爰に登り蘇菌を取り、菓を拾ふ。然るに長(田畑注、東北)の隅の山の半腹に、松柏茂り森々たるか、常に白雲埋もれてあり。爰を天狗の栖と云。曾て行人なし。墨子幼年の頃、府中(田畑注、甲府)横沢町の者、彼山の嶺に微塵に成て死し、体はすた／＼に裂け、首は逆の向うの梢に掛りしを見る。其外種々希有なる事あり。」

ここには、山の一角に深々とした森林におおわれているところがあるといふこと、ここに常に白雲がかかっているという事などが説明されている。

こうした神秘的な不気味な雰囲気は、天狗の住居としてうってつけである。もともと実際に「天狗のすみか」と呼ばれていたことも明らかであるし、このためにおとずれる人もなかったという。かつてこの山のあたりにふれて命を落したという人もあったという。この思ひ出話などは、聞くにたえない無惨なものである。

この事件がはたして実際にあったこととあれば、これは山岳遭難の一事例とみることができようであろう。こうした事実を天狗のたたりとして評価していたのであろう。

その第二点は天狗に関係のある地名は、そのすべてが山中や森林などにおいてのみみられるという訳のものではなく、例外もあるということをここでとくにとりあげておきたい。

すなわち甲府盆地の北よりには、古くから天狗沢村というのがあった。これは甲府のすぐ西よりにあたる村でもある。台地上にひらけているというものの、けっして山のなかや、森林のなかなどという土地がらではない。

このころに『甲斐国志』をひらくと、巻三「一」につぎのような記事がみえている。『甲斐国志』は文化十一年(一八一四)に編まれた書物である。「天狗沢村(田畑注、中略)本村八竜地ノ東北ニ隣り、島上条・牛戸へ各四五町なり。産神天狗ノ社アリ。村名ノ所興ト云。」

ここには村の産神であるという天狗の社より名を得ていることが説明されている。

なお、「天狗の住居」の後文には、天狗の踊り場とか、天狗の相撲場とか、天狗の相撲取山というのをあげ、これらについては、つぎのように説明している。

「こういう命名は、天狗に対する畏敬や恐怖よりも、むしろ親愛感をしめしている。主として関東、東北の江戸末期以後の命名のようである。神もやはりおとろえるし、安っぽくなるのである。」

ここには天狗に対する近世の人びとのかえりかたの変遷といったものをしのぶことができよう。そこで、このことに関係してひとこと申し上げておきたい。天狗に対する怪奇感が薄らいで親近感もたれるようになったのは江戸時代末期であるという誤解をまねきやすいということである。

(終り)



●Kurungan Ach
(6222)

●6223

●5893

●6441

●Lunkho II
(6885)

●Hewara
(6849)

●Lunkho I
(6902)

●6206

●Noghor Zom
(5939)

●6166

●Kolgar Zom
(6661)

●Akher Chioh
(7017)

●Tez
(6995)

●Shoghorok
(6838)

●Shayoz
(6905)

●Urgend
(7016)

●6421

●Shah
(6550)

●Saragharar
(7184)

●7385

●7350

●7338

●Languta
Barfi (6827)

●Kolgar An

東部・ヒンズー連峰

上掲の写真はオーストリアのG・ドルバー博士(Dr. Gerald Gruber)から直接私に送って来たものであるが、これは Jahrbuch des Österreichischen Alpenvereins, Band 91, Jahrgang 1966 に発表され、又、最近の A. J. 1967-1 にも転載されているものである。

G博士は一九六五年の八月八日、ブニ・ゾム峰(Buni Zom, 6553m)の5700mの地点から小型経緯儀を使って上記諸峰の高度を測定した。

これによって東部H・Kの諸高峰の高度は大幅に改訂された。従来のものと比べ多少高くなったものもあるが、七〇〇m級から格下げされた悲運な山もある。

ノシャックのように、イストル・オ・ナルの蔭に隠れているのは測定のしようがないが、それでもその東峰のシンゲイクだけは出ている。

これらの高度が果して全面的に信頼し得る最終的なものであるかどうかは、素人の私には判断が出来ないが、専門の地理学者が科学的に行なったものとして、われわれは当面これを使わせてもらうことに否かであつてはならないと思う。

知床の雨

川崎 精雄

知床の梅雨の炉に寄り船を待つ
欠航の海へ知床の海霧が
サロエ湖は海と続き五月雨のち
五月雨のオホソク海の黒さ見よ
はまなすの丘北海と牧へ

(四二・六)

方にはある)が、その高度が、G博士の6752mとなっている。これは従来は6660mとなっていたものが、最近6843mに変わったばかりであり、ドイツのフレイ(Wolfgang Frey)もこの高度を採用している。従ってここから、高度論争が出て来ないとも限らない。大いなる興味をもってその成行きを見ていたいと思う。

尚、この問題については、Dr. Adolf Diemberger, Dr. G. Gruber, Wolfgang Freyの三人に手紙を出して、その見解を明らかにしてもらう考えている。

私は最近、ノルウェーのアルネ・ネス(Arne Neess)の書いた「Trich Mir」を訳したが、これをよくみると、上掲の写真の一番左の方にある「South Glacier Peak (Südglacierspitze)」は、ネスは「S-Glacier Peak」と書き、Southとはなっていない。つまりこれは、南バルム河の上にある、Sの字型の氷河の頭、というふうに解されるので、私は「S型氷河峰」としておいた。

上掲の写真の下「1」は、それだけの山名に対応するもので、括弧でくくつてあるのが新高度、括弧のないのは旧高度である。

又、一〇頁にある地図は、この写真の範囲と同じであるから対比するとよく理解ができると思う。

一頁の地図(概念図)は、中部H・Kの六〇〇〇m峰の位置を示すもので、六〇〇〇mと五〇〇〇mの未踏峰があるのは相当の魅力である。しかしこれらも少し調べてから行かないと、バカを見る(?)ことになるかも知れない。

いずれにしろH・Kには、まだまだ解決しなければならぬ地域が相当に残されている。大いに行つてもらいたいと思う。

(吉沢 一郎)

海外通信

ヘルー通信

東京 白稜会

(リマ第四信)

予想した通り(或はそれ以上に)通関にてござりまだ山に向うことが出来ません。焦りが禁物のお国柄とは云い乍ら、まったくうんざりなかつたことですが、日本でも良く判らなかつたことですが、どのような方法が最も迅速で楽なのか見当が付きません。

我々の方法は、大使館から大蔵省へ一時輸入の手続をとってもらい、三菱商事の使っているAgentを通じて通関というところになっているのですが、大蔵省の許可が出たのが五月二十六日。税関で各種のCheckが終了したのが六月二日(金)です。

結局、課税額相当分の41,670ソール(約\$1,500)を何らかの形で保証せねばならぬということです。勿論、そのような準備金は一人\$500の内からは出る筈もなく、我々のみならず、どこの隊も同様だと思いますので、一体、この国はアンデス登山を歓迎するのかが、迷惑に思っているのか判らなくります。

我々は大使館に保証してもらつて通すしかないのですが、この国は、土曜、日曜が全く使えませんで、本日、六月五日(月)に大使館の山口参事官にお願いに行ったところです。

明日、大使館の担当者とAgentが連絡をとって、書類と大使のサインをもらうことになるのですが、これもまだ決定的な方法とは断定できません。先年、同様の問題でトラブルのあった隊があるらしく、大使館も外務省を通じて要請のあったもののうち問題なしと思われるもののみ保証を与えるそ

うで、これだけは安心です。

リマ市内も大よそ見るところは見ましたので、ワラスあたりまで行つてみたいところですが、そのような状況で遠出もならず、中途半端で困っています。また、主行動が終らぬうちは、予算がどうなるか判りませんので、金も使えぬといった次第です。

リマから、さほど遠くないところに手ごろの山があるらしく(コルディエラ・セントラル)工科大学の学生が案内してやると云つてもいいのですが、今はそれどころではありません。

山に入るのは、六月十日になるかも知れません。Chiquianに入ったら、また見通しなどお知らせできるかと思ひます。

(Junio 5 '67) 市川 正

(リマ第五信)

一時はどうかなることかと思つた通関も強引なる戦法が効を奏し、本日見通しがつき、明日午前中に荷物を受取れることとなりました。

従つて明日中に荷の整理を終え、六月九日に Chiquian へ出発します。

大分遅れてしまいましたが、不慣れなことゆえ、日本発送の際の手ぬかりが最後までひびきました。

即ち、物名の評価額を相当に低くしておかぬと、それを標準にして課税額を計算されてしまうのです。我々は保険のためだけかと思つていたのが失敗でした。長野隊は、三分一程度に評価したため、19,000ソールの保証金を積んで早く通関したようす。

我々も、これだけ遅れた上に、18,000ソールの保証を積むのでは頭にくるもので必死の努力の結果、一銭の保証金も積まなくて通関に成功しました。但し、この国では物を手にするまで安心できませんが、今日、我々の手で最後の役人の処まで書類を持ちまわ



● Shachaur (7084)
● Udren (7108)
● Nadir Shah (6814)
● Kishmi Khan (6766)
● Mandaras (6632)
● 6272
● 6447
● Ghul-Iash-Zom (6593)
● 6520
● Shingek (7291)
● (7226)
● (7373)
● (7403)
● Istori-o-Nal
● Safed (6607)
● 6450
● 5995
● 6301
● Ghul-Iash-Zom (6611)
● (6652)
● 6589
● T.M. Nord (6732)
● Tirich Mir (7691)
● (7708)
● S.G.L. Peak (6700)
● K.I. T. Mir (6361)

り、これですぐ荷を渡せるといふことを聞きましてので大丈夫と考えます。即ち、大使館の保証状を持って行き、幸い三受商事の支配人の秘書、セニョリータ・アルティネリが税関に顔が広いのを利用して同道してもらい、税関長に直接談判をしました。ちょうど、関税引上げの法案が議會を通過したばかりで、悪い時期に合ったため、ゴタゴタしました。今後は全て保証金を積まされる方向のようです。

何しろ産業が立遅れて、関税で食っている国ですから、当地の人にはうっかり物を送ると、ガッチリと課税され、受取人がペラボウな税金を払わぬと小包も受取れぬような仕組になっています。そこで、有難迷惑となるそうです。今までは、極度の緊縮財政をいっておりまして、本日は通関税という訳で、初めて自分たちの金で日本料理を腹一杯喰って、溜飲を下げました。

滞在が長かったので、結構友人が出来まして、ヘンなアメリカ人が毎晩遊びに来て退屈はしません。Patrick Henry Murray という名ですが、自分で、私はバット村井と云います」といった調子で、日本語が上手く、我々に漢字の音と訓の講釈をするような始末。毎晩、日本語、英語、スペイン語チャンボンでY談をやっています。いざ日本にも行くそうです、その折に紹介します。6/8 2:20

追伸 6/8 24:00

荷物は我々が立会うまでもなく、全然箱を開くことなしに入手しました。但、Agentの配達車の都合で夕方十七時頃になってしまい、整理が殆んど出来ず、出発は六月九日夕刻といったしました。

リマへ再び戻るのは、七月二十日頃となるでしょう。その間、手紙を出されても、我々の手に入るのは、やはり

リマへ戻ってからですので、その点御配慮下さい。

本日、文部省で農工大パーティに会いましたが、彼らの荷を積んだ船は六月六日に入港したそうです。

とにかく、今年は日本の三隊共、全く異なった方法で通関することになりましたが、どうが最良かは、帰りの荷を送り出さぬと判りません。

市川 正

◆ポリピア親善隊便り◆

六月十四日

六月九日まで、いつも空には雲、稍には風の日が続いていましたが、どうやらそれもおさまって、今日このごろは、快晴無風の毎日が続くようになりました。こんなに素晴らしい天候なので、まだ荷物が私達の手に入らないので、山に入る事も出来ません。しかし今日の午後には必ず取れるだろうと、日東ポリピアの方がおっしゃって下さいましたので、できれば明日、おそくとも明後日には出発しようと考えております。

こちらに来てからはや二週間余も経過してしまいましたが、南米調に慣れる事は、ほんとうに容易な事ではありません。特に東京のような時間に追われた生活をしてきた者にとっては極端状態に陥ってしまったような感じがする、といった南米人に叱られるでしょう。

昨日、ラウラニのベースキャンプ地を偵察する意味で、ジープで山麓を徘徊しましたが、ユルディエラ・レアルには湖が非常に多く、その美しさに、ただただ嘆息をあげるのであります。ユンドリは三つのピークがおりなす不思議な容格をした山で、あたかもコンドルが空に飛び立たんとして翼をひろげた時のような様子をしています。又、ワイナボトシは美しい端正な姿を

していて、しきりに日本の鹿島槍が思われる山ですが、特に北西面からの姿は人をよせつけないので、美しいヒマラヤ壁をまとい、鹿島の北壁を思わせるものがあつてしばし、我を忘れて見入ってしまいました。

イヤンプを限りとして広がるユルディエラ・レアルには、ほんとうに楽しい山が沢山あるようですが、ここに来て感じる事は、これらの山々は、何も肩書き付きで登らねばならない山ではなく、ほんとうに軽い気持ちで楽しみながら行く山のなんだ、という事です。ワイナボトシ、イリマニをはじめ、沢山の山々は、これを日本においたならきつと千客万来の所ではないかと思われるような所で、ただ高地に不慣れた日本人に少し不利だという事を除けば、ほんとうにポピュラーな山になる事だろうと想像されます。しかし、なにしろ山に興味をもつ人間の少ない土地がらなので、今だに未踏峰が残っていたり、何度目の登頂などという事があつたりする事と思います。

ラバスの町の様子、いろいろ書きたる事は山ほどありますが、この話は別の機会に譲りましょう。

ともかく、日本人の方々が、ほんとうに親身になって援助して下さいますので、こうして楽しい南米生活を送る事ができるのだと感謝に堪えぬ日々でございます。次にお便りする時には、山の様子なども少しは書き添える事が出来ると思います。

では又、ごきげんよう。

六月二十四日

荷物が税関に留まってしまつて十六日の午後五時半ごろやっと引き出せたのです。それで日程もずいぶん変更しなければならなくなつたのですが、その日夜半すぎまでかかって荷を整理して十七日に山に向いました。高度順化のためラウラニ山群に入る予定だった

のですが、あまり手ごつた山ではなさそうなので、Vinochura山群に入りました。ところが地図が不完全なので全く無名の山が多く、地形も実際のものとは全く異なっていて、とまどつてしまいました。

でもこの付近は五四〇〇—五六〇〇mほどの山が数多くあつて、二十三日まであちこちに登り、楽しい山行が出来ました。なお、ユルディエラ・レアルは非常に長い山脈でチャチャコマニと私達の入った山群の間に谷をへだててもう一つの山群(五五〇〇mほどの山々)があつて、はじめて考えたようにチャチャコマニの雄姿やチャチャココの威容をの目前にする事はできませんでした。

そこでジープで山麓めぐりをして、少し地形をはつきりつかみたいと思つていました。ただし、日程の関係でどの程度、実現できるかわかりません。私達が見たところでは、リンコ・グルーより以南の山々は比較的地図通りでEwin HeinのものにしてE. Echovillaのものにしろ信用してよいと思われませんが、それ以北は、どうも信頼に足るものではありません。

ともかく、計画通りの谷に入りVinochuraはそこからすぐ後線だろうと推測していたのですが、どうもその予想は裏切られて、大きな河水がかつていて、テント地(四六七〇m)からモレーンの上を四時間近く歩かなければ麓まで行けつかないのですから、炎天下を歩いている私達は全くまいてしまいます。

私達の登つた山は

五三一〇〇m峰(岩のかたまり)
五四一〇〇m峰(雪のドーム頂上)
五三〇〇m峰(五二〇〇mでクレパスにはばまれた)
五二〇〇m峰(北岳パットレスのような所)

等ですが、これら正式な山名はわかりません。もう少しよく見てから検討したいと思っています。

こちらの天候は予想したより悪く、午前中は快晴になって午後にはアトラが降るが曇が多いという日がほとんどでびくつきしています。風も大変強い日が多く、ちょっとあてがはずれました。でも午前中にがんばって午後下山に使うようにしたので行動にはとくにさしつかえませんでした。行動は毎日でしたが、特に支障はありませんでした。

二十三日に下山しましたので少し期間が短かったのですが、今までは、高度による影響はなく、順調です。

この山行では、ポーターの必要もないと思いましたが、三人で決行したので、ジープが途中で背負ってしか行かず三人で各々30kg近く背負って一時間歩かねばなりません。それでもハアハア言いながら湖のそばにB・Cを建設して一週間の日々をここで過ごした事は私達にとって大変意義深い事だったと思います。

これからの山行では、ポーター（ペナンシオの弟）を一日三〇ベソで傭う予定です。ワイナ・ボトシ（カカ・アカと現地人は言わずにそう呼んでいます）には七月一日から一週間の予定で行くつもりです。なお、ボリビア山岳会の人達とそとでイリマニに登ろうという事になりました。はたしてどうなる事かわかりませんが、山岳会から女性メンバー三名が同行するといっています。なお、山岳会の人達がこれからどういう態度に出るかかわかりませんが、今までは、暇のあるかぎり夜山岳会に出掛けては卓球をしたり話を聴いたりしています。

女性には二十歳・十八歳・十八歳という年齢の人達なので少し心配ですが、外見は私達くらいの方です。です

から私達の年齢をむこうでは全く信用せず、痛し痒しというところ。今のところ、天候もまあ回復し、山にも行けたので、何か気持ちにゆとりができたようです。

ではまたお便りします。
ごきげんよう

編者注、尚、七月八日付A紙によると、三人は七月四日、ワイナボトシ（別名カカ・アカ、六〇九四m）の登頂に成功したらしい。

◆ ◆ ◆

三人は一日から入山し、四九二〇mにB・Cを設け、氷河の状態が悪いため苦勞したが、三日には五七〇〇mに達して露露した。

四日は朝七時半から登りはじめ、午後二時半登頂に成功した。登高中はガスがたち込め、雪も降りだす悪条件で、頂上では三人とも落雷にあてて心配したが、無事に下山出来た。

日本女性による六二〇〇mの登頂は、三十五年、インド・パンジャブ婦人親善登山隊（細川貞隊長）の浜中、岡部両嬢が、デオ・チバ峰（六二三〇m）の第四登に成功したのに次ぐ登高記録である。

とあるが、最後の括弧内の六行の中には、間違ったところが何か所もある。もう少し研究して書いてもらいたいものである。

（吉沢）

（右下の写真）

関田隊の登ったワイナボトシ（六〇九四m）。一九六一年に一橋隊が行った時に、チャカルタヤのスキー場ヒュッテ（五二〇〇m）から撮ったもので、左の背景はレアル山群の北部の山々。手前の道はラ・パスに通じる自動車道。柱は宇宙線研究所の前にある入口の門です。
（吉沢）



◆長野県アンデス隊便り◆

横地 康生

日本出発以来、ご無沙汰お許し下さい。お陰様で念願叶って、アンデスへやってくる事が出来ました。そして今、ワンツァン（Huancan）のC2におります。

BCを作って一〇日、五四〇〇mのワンツァン氷河の中にC2を出しました。氷河というよりスノー・エプロンとも呼ぶべき雪原で、日中の暑さには閉口します。それに、アマゾン側からの風の通路にあたり、突風が時々あります。

ポーターのバプロ・モラレスが病気のため、今回はポーターなしです。それでも、宮下（昭）君がいたので特別困りません。今日、明日と二日休養をとって、あさってからワンツァンの稜線にC3を出し、更にC4まで出して

アタックの予定です。六月中には何とか登頂の予定です。

ワンツァンはクレバスが非常に多く、すでにヒドン・クレバスに一人が落ちて、奇蹟的に助かるという事故がありました。

日本からの手紙によると、ヨーロッパ、アラスカ等で、日本隊が遭難者を出しているようですが、我々も慎重にやらねばと思っております。

ACCのA・カーターが直ぐ近くに来てBCを作り、Cuban O'earを組んでいます。私も偵察はしましたが、とても登れるピークではありません。彼が一九六五年にワンツァンの直ぐ隣の五七〇〇位のピークに登っていますが、何というピークだったでしょう。そのピークの下にC1を張っています。美しいピークで、テント場のあとに残っています。

七月に入ったら、Santa Cruz No. 1へ移ります。それでは又、
Belén 14, Huancan, Peru.
a/c St. Seiso Tanikawa.

（吉沢一郎宛）
（編者注）
四二・七・九付M紙によると、長野県山岳協会のペルー・アンデス登山隊（村上栄一隊長以下二名）は六月二十三日、ワンツァン南峰（五九一五m）の初登頂に成功したとリマに連絡があった。

同隊は更にルレク（五七〇〇m）アベジャ（五五五〇m、ヨソ五四〇〇m）のほか二峰にも登頂しているという。

○アルパイン・クラブ訪問○
杉 田 博

七月二日、ニューヨークよりロンドンに着きました。A・Cを訪ね「J・A・C・パジャがない」ということが、JACの会報「山」に書かれていたの

で持ってきました」といい、シクレタリーのミセス・ロングランドに渡し、パジャの額には非日本のJ・A・Cのバッジも入れて呉れる様、頼んできました。A・Cのバッジも、J・A・Cに一つ預けてきました。

アメリカでは比較的時間があったのでゆっくりでき、A・A・CとN・G S（ナショナル・デオラフィック・ソサエティ）を訪問しました。

A・A・Cにしても、A・Cにしてもクラブ・ルームの立派なのに驚かされました。ちょっと較べてがっかりです。一日も早く新ルームのできるのを速くロンドンより祈っております。

ニューヨークでは、A・A・Cのスキー嬢に案内され、市内見物まで同行して頂きました。日本の皆様にも宜しくと、A・A・CでもA・Cでも言われてきました。

ロンドンではフランス・エドワードという本屋を訪ねました。六五年の歴史がある由、仲々よい構えの店、おやじも山の古本を集めるから宣伝してくれと、英国人にはめずらしいお世辞とも云える様な事をいっていました。スイスでは五十六日過したと思っています。

（七月四日付、ロンドンにて、松田宛）

◆講演と映画の会◆

日時 昭和42年9月1日（金）
午後6時〜9時

場所 東京朝日講堂（朝日新聞）

講演 西堀栄三郎・川崎隆章

音楽 解説 早川義郎

映画 K2、アルパマヨ

会員券（二〇〇円）取扱場所

西武百貨店二階、銀座好日山荘、

神田美津濃・飯田橋二葉靴店

等。



図書紹介

☆セントエライアスとマッキンレー☆

関西登高会編

一九六四年および六五年アラスカのセントエライアスとマッキンレーに遠征し、その登頂に成功した関西登高会の正式報告書である。巻頭にセントエライアス隊の写真四十二枚、マッキンレー隊の写真二十四枚を飾り、簡単な説明を付してそのアウトラインを紹介し、本文は、アラスカ登山抄史、座談会(計画から登頂まで)、遠征隊日誌、登頂記、隊長雑感、装備表、食糧表、会計報告、遠征に至るまで(関西登高会の歩み)、アラスカの山のタクティクス、隊員略歴となっている。アラスカ登山抄史ではアルピニズムの新しい舞台としての特徴と、バリエーション開拓期を迎えてその歴史を

述べ、一八九七年七月ブリッジ侯のセントエライアス初登頂から、一九六五年七月エバレット隊の北西後よりのセントエライアス初登頂まで、文献を付して登山年表をまとめている。

関係者ならびに隊員による計画から登頂までの座談会と、両峰の登頂記、遠征隊日誌で要領よく行動をまとめており、一つの会でこれだけの報告書を作るといふのは大変なことだったろうと思う。

関西登高会の歩みでは、昭和二十一年会の発足から遠征に至るまでの会の動きがよく伝えられており、この二つのアラスカの山の登頂も、戦後二十余年の会の地道な山登りの積み重ねの上に生れたことがわかる。アラスカの山は今後日本の登山者にとってますますファミリーなものとなるに相違ないが、本書はこれらの人々にとって貴重な指針となるものと思う。

昭和四十二年三月関西登高会発行 九十二頁、写真六十六枚、地図三枚、頒価千二百円。希望者は大阪市北区曾根崎上一丁目山の店内同会あて申し込みのこと。

(山崎安治)

◇

◇

〔編者注〕 本書に関する私の感想は、山崎氏の殆んど同じなので略すが、私が本書の出たのを「山溪」で知って金を送るから一冊頼むと申込んだところ、浅野清彦氏と西前四郎氏から手紙が来た。……吉沢さん大変なうろたがただという事で間違いない分をうろたがたつかって送発送が遅れました。アラスカ登山年表の項で多少補作(ゼロックス・コピーで挿入)したのをお送りしましたのでご勘弁下さい。……と書いてあった。私は思わず吹き出してしまったが、どうも必要以上に誤解されているらしい。勘弁して貰いたいのはこちらである。

(吉沢)

◇美しきマッターホルン◇

G・レビューア著
近藤 等訳

世界で最も美しいといわれるマッターホルンの魅力をあますところなく伝えてくれる。マッターホルンの初登頂百年祭を記念して、この山に限りない愛着を寄せる著者は、一七八九年、オース・ベネディクト・ド・ソーシュールがテオジュネル峠から初めてこの鋭い岩のオベリスクを仰いだ時の印象から説き起してくわしくその登攀の歴史をつづっている。

「これまで何度もなされてきたように、こうした物語を書きなすくよりも私自身はできるだけ原典を長く引用する方法を選んだ。こうすることによって、各自の性格とか、ものの考え方、あるいは哲学といったものが、表面にはっきり現われてくるからである。私が引用したテキストは、書物、雑誌、あるいは新聞などからのものだが、そのうち多くはよく知られていないものか、ずっと以前に絶版になっているので、入手困難なものである」と著者は述べている。

ウインバーの初登頂から始まり、イタリヤ山、ツムット山、フルッケン山、それに続く四つの壁の登攀、さらに冬期登攀を興味深く伝え、一九六五年二月ボナッティの北壁単独登攀まで四章にかけて述べ、第五章に著者自身の北壁登攀、フルッケン山の風の登攀について、最後にティラー親子との映画制作のための何度かの山行を楽しく回想している。

いい遅れたが、本書の主題はこれらの文章にあると、あらゆる角度から捕らえ空写真を始め、あらゆる角度から捕らえ九十枚の写真にあるといえるだろう。記録的な写真も含まれており、著者による北壁登攀の写真もある。(これ

で見る限り、北壁などどこでも登れそうである)ほかにバイヨンのコレクションからロベの石版画や、ビシエのデッサンなど数点があわせておさめられ、写真版、図版はフランスで印刷し輸入しただけにまず非の打ちどころはない。マッターホルンの登山史については一昨年アーノルド・ランが「マッターホルン・センティナリー」という本を書いている。しかしこの書物を見るべき写真が一枚もなく、内容もたぐの批判を受けているようだが、ランの書物とは比較にならない出来ばえのレビューア氏の書物が原書とまったく同じ体裁で、広く日本の登山界に紹介されたことは大変結構なことである。

昭和四十二年四月新潮社発行 二百二十一頁、定価三〇〇円。

(山崎安治)

川内 山

川内 山

村松町在住の古い会員笠原藤七さんが一昨年だったか『川内山とその周辺』という一書を出され、本会図書室へ寄贈された。それを会報で紹介したことが縁となって、川内の山へ来ませんかと誘われ、藤島敏男さんと二人で新潟行の急行に乗ったのは去る六月三日の朝のこと、昼過ぎには村松の笠原さんのお宅へ着いた。

その夜は田川内の碧水荘に一泊、翌日、早出川の峻険に魅せられ、ガンガの急坂を登って日本平山(一〇八一m)の頂に達し、帰路は日倉山から高石へ下った。次の日(五日)は昨日に比べて六月の太陽がサンサンと照り輝いていた。白山を正面にして車をかり、宮寄上の先のダムの傍から登りだすと、南方に守門の残雪が白い。まだ残雪の多い栗ヶ岳(二九三三m)の頂上からは、昨日はハッキリ見えなかつた五穀岳、矢筈岳などがよく見え、その彼方に御神楽がひととき高かった。栗葉師で先へ下る笠原さんと別れ、われわれはゆっくり下った。八木鼻の岩壁を仰ぐあたりから夕空に薄くなった栗ヶ岳を一瞥し、バスで本三条に出、駅前の旅館で入浴、夕食の後、もう一と月早いと思いつつ、低い山にもたのしさを山の下さが少なくないと思いつつ夜行列車にのりこんだ。

(一九七七年六月三日 望月達夫)

五九三六 阿岸充穂氏

札幌時計台二階画廊にて七月一日、七日、阿岸充穂山岳写真個展を開催した。

五七六〇 確井橋造氏

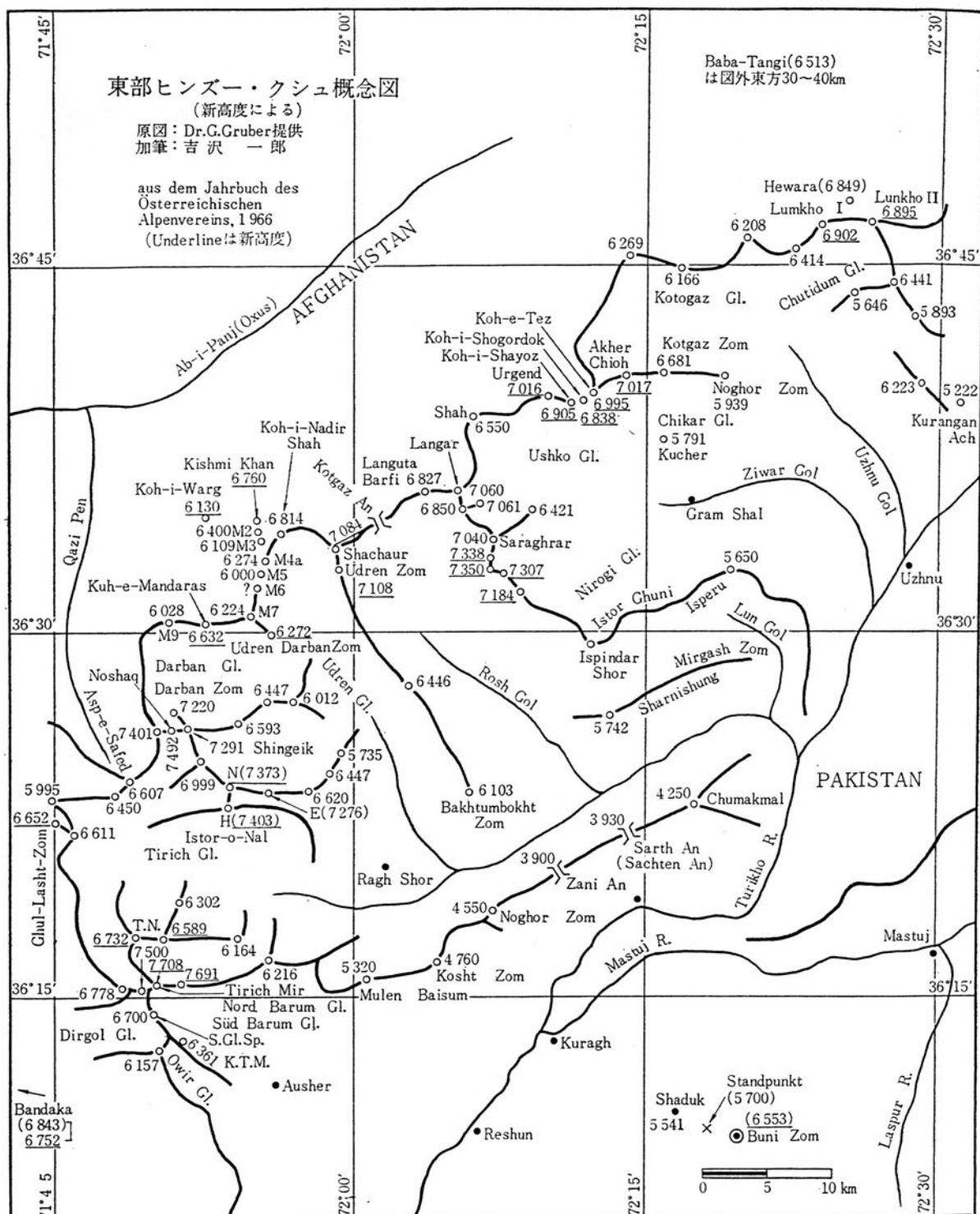
福島県ユースホステル協会会長。平ユースホステルの利用者は御連絡の程を。尚同氏は六月二日付いわき民報夕刊、くらし随筆欄に「心のささえ」を執筆。

◇図書紹介にもいろいろ◇

今度のAAJ 1967の図書紹介欄には15冊が取り上げられている。薬品を含めて医療関係が四冊ある。その他はマライニ、ハラー、ティルマン、M・グリフィン、ビーベラー等のものがわれわれに親しい。

ところで去年出た「Everest Diary」 by John D. McCallum. Based on the diary of Lute Jerard. 即ち「エベレスト日記」は、東京でもその誤訳が出版されたが、AAJにはこう書いてある。

「この本はいささか際も的的(sensational)に書かれている。当時の隊員二人に書評を頼んだが、どうしても書いてくれなかった。」
これだけが紹介文であった。(吉沢)



東部ヒンズー・クシュの概念図について

東部ヒンズー・クシュの概念図で現在ヨーロッパで最も信頼をおかれているのは、ポーランドの首都ワルシャワにある Wsokowski 山岳会に属する Jerzy Wala の作ったものである。この地図は 30 万分の一で実に詳細を極めており、欧州の登山家達の賞讃をうけているのもムべなるかなと思う。但し、上記 G. Gubler による新高度はまだ記載されていない。

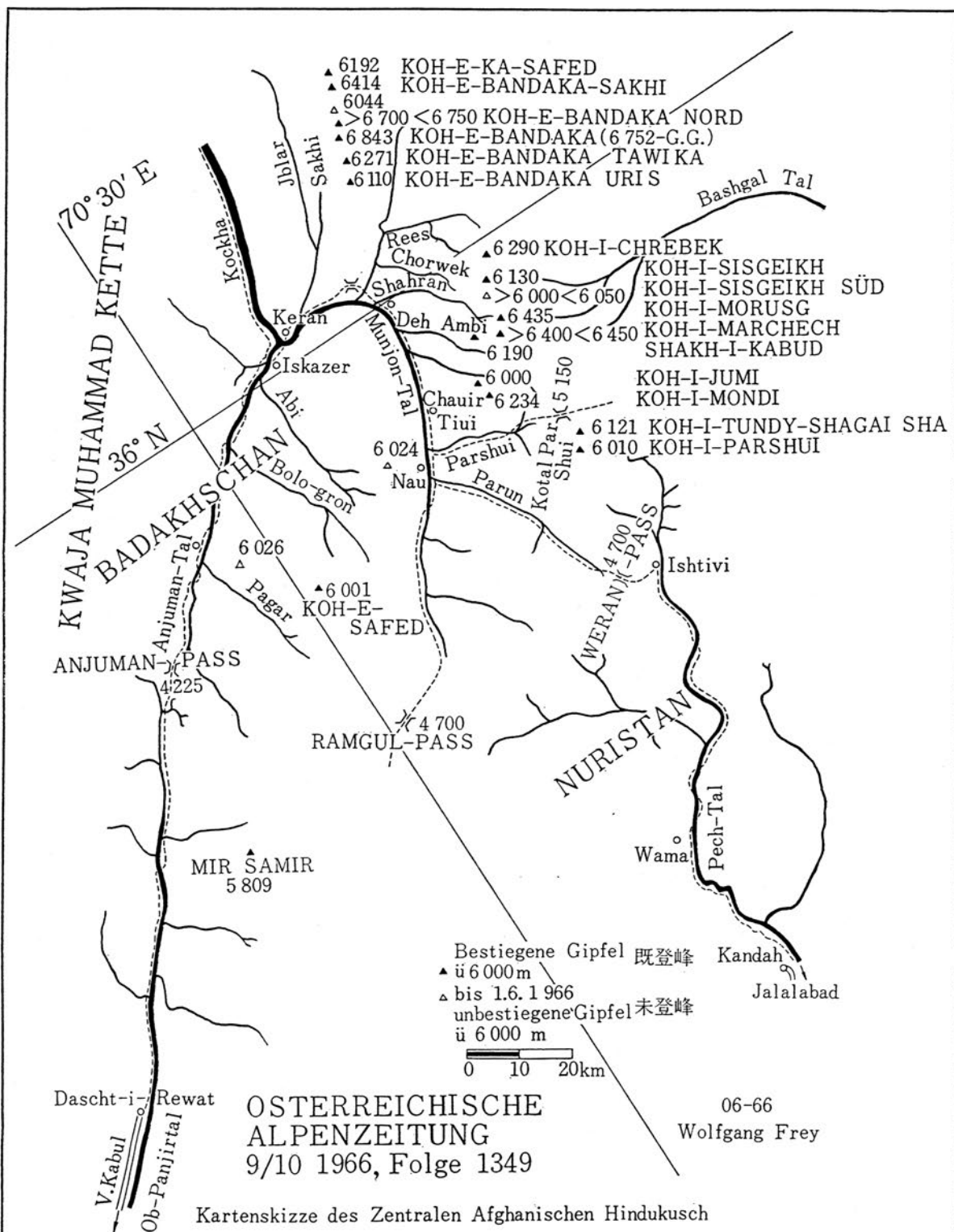
この地図の余白に、ヒンズー・クシュ全体を示す二五〇〇万の概念図が入れてあるのは親切である。

さて上記の新高度については、別の個所でも触れておいた通り、グルンバーもいつているが、厳密な測地学的精度のものに対抗出来るものではなく、彼の測量も重大な高度の訂正を目的としたものであることを忘れてはならない。

これは彼の使った器具が、経費の関係で小型の経緯儀であったこと、当該の峰頂までの距離を、地図の上から出したものもある、という点なども勘案すべきであろう。

尚この概念図に左記のものを加えてもらいたい。

Lunkho I (6902) の南西にある 6414 の左肩に 6410 峰を、6208 と 6166 の間に 6096 峰を入れる。Jaspindar Shor (Sor) の高度を 6089 とする。³⁰又、6999 の南西に 6995 峰があるらしい。(吉沢一郎)



中部ヒンズー！
クシュの六〇〇〇m峰

この図はあとのものと同様、W・フレイの作ったものである。これによると六〇〇〇m級はこの部分で二〇座というところになり、そのうち未登峰は四つしかない。これも今年の夏中には登られていくかも知れない。

だが、アンジュマソンとムンジャンの両谷の間にはまだ六〇〇〇m級発見の可能性が残されている。最近来たA.J.の一九六七号の中に、「青い谷への旅」(Journey to the Blue Valley by Paul Newby)というのがあるが、これを読むと去年彼ら(剣橋隊)がアンジュマソンの支流Durrache-Ahiへ入った時、この谷の奥で六峰の初登攀をしたが、そのうちの二峰 Rast Durrach (右谷と意)が、高度計で六〇三三・五m(一九八〇〇ft)を示していることを発見した。このように思われるところで拾いものをしている。ヒンズー・クシュは面白い所である。(吉沢)



中部
概念图

ウォルフガング・フレイ

▽この地図について

この地図は、ドイツ山岳会のW・フレイ(Wolfgang Frey)が、カプセル地図研究所が作った五万分の一の地図を基にして作ったもので、今年彼が出版した、『ムンジャン河とバシュガール河の間』(Zwischen Munjan und Bishgal)という小冊子については紙面の都合上、全部は入らなかった。

パンダカー山群は右上部の上に続くが、その部分はムンジャン峠付近を含めて、今年中に作ると言っている。

した。中央大隊の行
っているウエラン峠
Kotal Weran, 47
00m)は、左下隅の
180m峰の真南一二
キロにある。

·W 湖

1965年夏現在

0 1 2 3 4 5 6 KM



谷川岳登山規制地域への入山手続き

指導委員会

谷川岳登山規制については既報の如くですが、当会としての手続方法、注意事項などについて、次のように定めました。

個人入会の場合

①規制地域に入山されるに当り、登山計画書(ルン備付)一通を指導委員会宛に提出して頂きます。但し提出は、入山の少なくとも五日(七日前)にお願い致します。

②入山時、現地の登山指導センターに証明書を提示し、検討された登山計画書を提出して頂きます。

団体入会(職域、大学山岳部他)の場合

①証明書の発行対象は原則として、山岳部満二年以上の在籍部員で、部長又は監督者から経験、技術について認められるものに限ります。

②手続き手続については、個人入会の場合に準じます。

注意事項

- ①証明書の発行は、個人入会、団体入会ともに、会員登録(本年度分)を提示された場合のみ限ります。郵送で手続きされる方は、会員登録受付番号、会員番号を明記して下さい。
- ②証明書の一通について一〇円徴収致します。
- ③計画書の検認
規制地域内の特に困難な岩場地帯に入られる場合は、指導委員会として検討させて頂きますので、最近の登山経歴を付記して下さい。
- ④登攀ルート、救援態勢の明確でないものについては検認いたしません。
- ⑤パーティに分れて行動される場合は、各パーティに一人証明書持参が必要とす。
- ⑥その他
登山届を登山される日の十日前までに、群馬県谷川岳登山指導センター(群馬県利根郡水上町)に提出し、届出済書を得られた場合は、当会の手続きは不要です。(広谷光一郎)

尚、この件に關する質問について

は、広谷(0423-21-1311)又は、松永(387-0631)まで御連絡下さい。

コロラド山岳会

訪日隊との交歓会

コロラド州デンバーに本拠地をもつコロラド山岳会の会員二名からなる登山隊が、William Y. Takahashi氏に引率されて去る七月七日来日した。コロラド山岳会は、五十数年の歴史を有するクラブで、現在二千数百の会員数というから、本会と同じ位の規模である。ただし、会の活動のなかには、今回のようなOutingを盛んにこなっており、またジュニア・メンバーな

る青少年層に正しい登山を普及するため、数多くのコースを実施している点で、本会とは多少性質を異にする。今回の来日メンバーも、昨年ヨーロッパ、一昨年はカナダへとというように毎年外国の山へ出かけているJohn Filsinger氏のようない線級のメンバーから、絵をかくたり写真を撮ったりして山を楽しむお年寄りのメンバーに至る各層にわたっている。従って、山ではいくつかのパーティに分けて行動することから、自分の国でやっているような困難な登山を日本でもやろうというのではなく、当然のことながら、安全を第一に考慮して日本の山へ登り、楽しみ、そして責任ある人々をそれぞれの家庭へ無事に送り届けるのが自分の務めであるというリーダーのWilliam Y. Takahashi氏は言っておられた。

この訪日隊との交歓会を去る七月八日午後四時から、一週間前に移転を完了したばかりの新ルームで行った。W. Y. Takahashi氏により来日メンバーが紹介され、同時にMOUNTAINERING-THE FREEDOM OF THE HILLS, GUIDE TO THE COLORADO MOUNTAINS, MOUNTAIN WILD FLOWERS OF COLORADOと三冊の本とTrail and Timberlineと二冊のThe Colorado Mountain Clubの会報およびカレンダーが本会に寄贈され、続いて松方会長により本会の会員が紹介され、本会からはベナントと六〇周年記念冊子が贈られた。

あいたくの雨模様で、さえない日であったが、多数の会員の参加を得て、賑やかな談笑がいつまでも続いた。本会々員風見武秀氏から、同氏の傑作の一つであるヒマラヤ絵がき集が訪日隊の各メンバーに贈られ、大喜びの彼等からサイン攻めにあうという一幕もあった。

一行のクライングリーダーであるJohn Filsinger氏により、氏の登頂したハルアンデスと、コロラドの山々のカラーズライドの映写・説明があり、この交歓会の終幕を華麗なアンドスの白き峰々の美しさで飾った。

なお一行は、七月九日から谷川へ、そして富士山・穂高・剣・立山へ登山し、七月二十四日富山へ下山。その後、八月から青森へ至る日本各地を旅行し、九月二日に帰国する予定である。

【出席者】
William Y. Takahashi 来校、Julia Takahashi, Tama Takahashi, Richard D. Lamm 来校、Joel Massie 来校、Harold McBride, Ernest Polley, Sam Alfend, Jewell Templeton, Ann Templeton, Avery Templeton, Janet M. Johnson, Thelma Wright, John Filsinger, John A. Dodson, Thea Phinney, Walter K. Hochkiss, Clara Niemoller, 松本熊次郎、野口末延、小野利次、高橋昭三、三浦義明、堀川英司、関口周也、松田雄一、斎藤平七、三田幸夫、吉沢一郎、風見武秀、松方三郎、山崎金次郎、牧野衛、尹官炳、芳野勉、斎藤謙、山崎安治、辰沼広吉、大塚博美、神谷泰、島田巽、瀬川貞利、村井米子、今井嘉道、島田公博、川森左智子、中河与一、松方雄、飯田誠、隈部恵子、岡島茂行、加藤博、三浦俊則、岡部浩子、岩野正代以上五十八名(関口周也)

サラケールの本

われわれに親しいF・マラーニニの「Paropmisio」を英訳から邦訳にして出版しようとしている人がある。という。F・Mさんはこれを知りて眉をひそめている。御注意まで。(I・Y)

AAC News, No. 95 46

☆Robert Bates, Charles S. Houstonが、アメリカ山岳会の名譽会員に選ばれた。

☆アメリカ地理学協会からAACの遠征基金へ四〇〇〇ドルの寄付があった。ビンソン登山隊その他の講演からの余剰金の一部らしい。

☆USAでは近く、非営利組織が発行する出版物に出ている広告にも、課税する法律が出るらしい。AACでもその対策を考えている。

☆Boyd Everettのヒマラヤ遠征及びRichard Hechelのフンザ地域(パキスタン)への遠征を確認した。これが資金と結びついているのかどうかはわからない。(それにしてもこれらの遠征は本気なのかどうか。)

☆一九六六年の夏、Alex ButulisとRon Hockneyの二人が、新登路により、ルンゼンリーのPortal Peak (4300 m)の第三登をやった。二人は又、スタンレー峰(5109 m)の西壁新ルートを開拓した。酷しい氷壁登攀と四九七〇mのピバークを含む。

Karl Gross さんの便り

前号一頁に紹介した彼に、私は早速五枚の大きな地図をかき、写真も大小五、六枚送った。余りに早く悉い返事が来たのでびくびくした。という札が飛行便で返ってきた。彼は、各月に「Wandern: Bergsteigen」を出している「Naturfreunde」という会の会員で、ここでは毎年、H・Kやアンデスに登山隊を送っている。

K・グロス君も中部H・Kに行っているし、私にいろいろな資料を送ってくれるWolfgang Freyも、この会員である。(吉沢)

計 報

本会永年会員塚本純一氏(会員番号四五六、一九一六年三月入会)は、既に物故されていることが、塚本氏の入会の際の紹介者の一人山口季次郎氏からの連絡により判明致しましたので、お知らせ申し上げます。本会は茲に謹んで哀悼の意を表します。

石黒清蔵さん急逝

去年の何月何日の夜だったかは忘れたが、板橋に在る親戚の人と坊やを伴にして石黒さんが突然家へ訪ねて来られた。石黒さんは古い会員(六一三番)であるが、私は直接会って話をしたことがない。その氏が急にしかも夜現われたのだからびっくりした。

机の上や左右には例によって横文字や縦文字の資料や地図が散乱していた。「やあ、やっていますな」これが頑固親父の最初の挨拶だった。そう、今思い出したが、その日は丁度、会報二五六号(去年の十月号)が出来て来た日であった。氏も言っていた通り、日本山岳会にはもう、三桁の会員は六十人位しかない。その古さに敬意を表して氏の送って来た「立山の近況」という原稿を巻頭言に出したその号が出来た日で、早速氏に三部贈呈した。「どうか、それは済まなかった、済まなかった」といいながら、自分の大論文を話の間に何度も見直していた。嬉しかったのであろう。

氏も人のいうことを聞かない相当の頑固親父だった。私と共通点があるの一度に肝胆相照らしという訳か。その頑固が彼の死因らしい。(吉沢)

休 会

五六三三 吉原悠子
四七六七 米田文郎
五七一〇 向後元彦
五九五三 向後紀代美
五三五五 田崎隆元
(注) 休会制度については会報山二六四号一五頁参照。

ルーム日誌(42・6)

6・1(木) 定例理事評議員会
6(火) 常務理事会
12(月) 常務理事会
15(木) ルーム基金募金委員会
16(金) 海外連絡委員会
18(日) 第一次荷物移動
27(火) 調査研究委員会
30(日) 第二次荷物移動、移転完了。

◇われわれの会員◇

望月 達夫

過日昭和四十二年通常総会総会議事録を送付され一読した。よくまとめられてあって、総会に出席できなかった会員に対し親切であり大変いいと思う。ただその中で気になることがある。経理担当の飯野理事の発言として「全体として最近入会者があまりふえていないが、健全収入をふやす意味でも、入会者をどんどん推薦してもらいたい」というのがある。発言の論旨にいさか不明瞭な点もあるが、入会者をふやして、入会金及び会費の収入をふやしたいという趣旨であろう。しかし、私は必ずしも賛成しがたい。誰でもいいから、どんどん入会して買っている会とはJACを考えたくない。いい会員をふやすならいいが、例えば海外の山へ出かける間際に急遽入会し、帰国したらアカの他人というような会員は入って貰いたくないのである。数は少なくても、一生涯会から離れないような会員を求めるべきである。

序でながら、入会金を年会費と同様に、経常費として使用しているが、これは戦後会の財政が左前になつていた時代の己むを得ぬ措置で、健全財政のため前からいえば、入会金は基金として蓄積すべきであらう。昔の経理はたしか、そうなっていた筈である。入会金を年々消費しているから、入会者が減少すれば赤字になるのが当然で、この点から入会者をふやして健全収入をはかるというのは、甚だおかしい考え方と思うが、どうだろう。ちょっと思いついたままを一言。

◇ルーム基金募金現況◇

一、募金応募状況は次の通りである。
八月七日現在申込者（会員外を含む）

四、五三九、九〇〇円（五六・七％）

二、応募現況を考慮して千数百名の会員宛に再度応募依頼状を送付することとし募金期間も二ヵ月延長して九月末までとした外、分割希望（従来この点が不明確）をはっきり認めることとした。

三、今回募金の趣旨からして、金額の如何を問わず、会員全員の賛金を得たいと考えるので、未応募の会員に対しては何回となく、きめ細く募金依頼を続けていきたいと考えている。

四、会員外の会社個人に対しても本会の関係の深い先等に対し、山岳関係資料整備（山岳資料センターの役割を強調）の目的で募金をお願いすることとしているが、この趣旨にご賛同下さる会社を知っておられる会員は事務局まで是非ご一報下さるようお願いしたい。

五、既に応募いただいた会員の方でまだ追加して下さるご意見のある会員は是非とも追加申込をいただきたい。又、お知り合いの会員でまだ申込されていない会員があったら、是非募金について一声かけていただきたい。なお募金申込者の明細はその一覽がルーム掲示板に掲示されている外、各支部長宛に資料を送付してあるのでご参照願いたい。（ルーム基金募金委員会）

◇除籍訂正◇

四五三二 田代実氏（福岡支部）は、会報二六四号十六頁、昭和四二年除籍者の名簿に掲載しておりますが、会報掲載と入れ違いに四年度迄の会費納入がありましたので、除籍名簿より削除いたしました。

◇ネパール国マナダハ

一氏の来日◇

第二次マナスル登山の当時、一九五〇～五五年、ネパール国の外務次官（Foreign Secretary）であったマナダハ氏が去る六月六日夕刻、米国からの帰途来日、羽田より本会宛に連絡があった。本会では直ちに海外連絡担当の関口理事が連絡のため、東京プリンス・ホテルを訪ね、八日、三田副会長が都内見物に案内した後、午後六時半より、関係者により、国際文化会館において夕食会による歓迎会を開催した。

同氏は一九五五年外務次官より、文部次官に移り、一九五六年～六一年には、英大使（兼ソ連、独逸、フランス、スイス大使）としてロンドンに滞在したことがあり、現在は member of the Standing Committee of the State Council of Nepal（ネパール



国王の最高顧問の委員会のメンバー）の要職についている。

〔来日の出席者〕

Rt. Honble Shi Runa Prasad Manandhar, G.C.V.O., C.B.E., M.A., 松方会長、日高、三田副会長、榎、成瀬、堀田、辰沼、丹部、松田、関口、以上十一名（松田）

（写真説明）

右からジョン・ハント、テンジン・マナダハール、ハント夫人、元英国外務大臣西彦の諸氏。Nov. 6th, 1967 ロンドンにて撮す。（提供、西彦氏）

◇新職員紹介◇

ルームの移転、図書室の独立に伴い、専任の図書担当事務員（ライブラリアン）をおく必要が生じ、その候補者野求めていたが、この度本会図書委員野上成男氏（国会図書館勤務）の紹介に

より、大越聡子さんを採用することになりましたので紹介致します。

大越さんは、埼玉県加須市出身、昭和四二年三月東京大学短大国語科卒、図書館司書の資格を所有。埼玉県立不動岡高校時代山岳部員として活躍したことがある。

七月十日より勤務につき、当面は圖書の整理、寄贈圖書の受入等の仕事におられるが、将来は地方会員からの文献献写サービス等にも応ずる予定ですので、宜しくお願いいたします。

編集後記

★本号は会務報告が間に合わなかったもので、最近オーストリアやドイツから送られて来た地図を入れておいた。H・Kが人気の中心になっている現在、皆さんにも多少ご参考になることと思う。今後も同じことをやってみたい。（Y）

あなたのネガから パネル張り

山岳写真

ありし日の、苦闘と歓喜をいまここに

35 mmからすばらしい迫力！

あなたのネガから、明快なコントラストと適切なトリミングで、大型・美麗・パネル張り写真を製作いたします。ネガと返送料150円同封でご注文下されば到着後1週間前後で製作発送いたします。代金は着品後10日以内にご送金下されば結構です。なお代金前払いの方には送料は弊社で負担いたします。但し、ネガ不調のため作品にご満足頂けないと思われる場合には、ネガ、代金、返送料ともそのまま直ちに返送申上げます。

お気軽にネガを送って下さい

白黒の部

■全紙半分……………パネル張り ￥1,200
■全紙（新聞1ページ大）……………パネル張り ￥1,600
■全紙2倍……………パネル張り ￥4,000

カラーの部（ネガ、カラーに限りです）

■四切……………パネル張り ￥1,500
■半切……………パネル張り ￥3,000
■全紙……………パネル張り ￥5,000

上記以外のサイズ、または同時に多数のご注文の際はご照会下さい。別にお見積申上げます。



優れた技術とハイセンスの

カタログ送呈

本多写真

本多善博

名古屋市熱田局区内柴田西町1-16 TEL (611) 7047

昭和四十二年度

「山」会報編集委員の顔振れ

編集代表

担当理事

吉沢一郎
松田雄一
宮下秀樹
小方全樹
竹内通樹
坂本敏明
酒井祥明

昭和四十二年八月十日発行

東京都千代田区神田錦町

三二三 向井ビル

発行所 法人 日本山岳会

頒価五十円 (23) 七四四一

振替口座東京四八二九番

印刷所 株式会社 技報堂